

40年代マルクスの価値論とJ. スチュアートの『経済の原理』

竹 永 進

1. はじめに

筆者は以前、経済学研究に本格的に取り組みはじめたころのマルクスの価値論の性格の変化を、イギリス古典派経済学とりわけリカードに対するマルクスの評価の大きな変化とのかかわりにおいて考察することにより、この時期のマルクス自身の価値論の問題について論考したことがある⁽¹⁾。そこで論じた問題は、『資本論』に結実するマルクスの経済学説の成立史の一環として、それまでにも多くの論者によって取り上げられていたものであり、「古典派とマルクスとの関係」というずいぶんと手垢のついた論題であった。だがマルクスは自らの経済学説を構築する長い過程において、経済学史のいわば嫡流ともいべきスミスやリカードに代表されるイギリス古典派経済学のみならず、同時にこれとは対立する流れとも格闘を繰り返した。とりわけ、スミスの『諸国民の富』に9年先立って刊行された『経済の原理』（以下、本稿では『原理』と略称する）により「最初の経済学体系」⁽²⁾の建設者となったJ. スチュアート（以下単にスチュアートと表記）の経済学は、マルクスにとって主流派経済学におとらず生涯にわたり重要な存在でありつづけた。特に、いわゆるセー法則を事実上の基本前提とし商品交換を物々交換に還元して把握する古典派に対立して、このような還元（前者の后者との同一視）を斥け商品交換における貨幣の不可欠の媒介的役割を明確に認識して、販売と購買（そして、供給と需要）を明確に区別するスチュアートの「貨幣的経済理論」は（後のマルサスやケインズにも連なる）反古典派的な伝統の起点となったが、マルクスの『資本論』も、彼のマルサスに対するほとんど全否定的な評価にもかかわらず、こうした反古典派的な商品交換把握を共有するものであったと言ってよい。だとすれば、『資本論』に体现されるマルクスの経済学の学説史的性格の研究にとって、このような経済学の非古典派的な流れに属する諸学説とのマルクスのかかわりも、古

典派とのそれにおとらず重要なテーマとなるであろう。しかし、一昔前のように『資本論』ができあがった不動の教条の体系としてではなく学説史上の相対的な存在として研究されるようになってからすでに少なからぬ時間が経過しており、それに応じて研究成果の蓄積も進んでいるにもかかわらず、多くのマルクス経済学研究者にとってスミスやリカードの影に隠れた形の存在にとどまったスチュアートはほとんど取り上げられることがなかった⁽³⁾。

本稿はマルクスのスチュアートとの関係について全面的に論じようとするものではなく、まずもって、上記の拙稿の表題が指示する課題のうち前回は扱っていなかった重要な側面を補おうとするものであるが、このような問題（40年代におけるマルクスとスチュアートとのかかわり）にかんする研究は、管見のかぎり現在までまったく手つかずの状態にある。こうした空白状態には次のような事情がその理由として考えられる。

注

- (1) 拙稿「40年代マルクスの価値論の性格」、『経済学論纂』、20巻1／2号、1979年3月。
- (2) 小林昇『最初の経済学体系』、名古屋大学出版会、1994年刊。本稿は小林のこの近著およびこれに先立つ彼の膨大なスチュアート研究における、マルクスのスチュアートとのかかわりについての論及から多くの示唆を得ている。
- (3) マルクス経済学研究者が一般にスチュアートの『原理』に注意を払ってこなかった事情について小林昇は次のように述べている。「『剰余価値学説史』の冒頭できわめて簡潔に取扱われた『原理』に、重商主義としての特質がつよく与えられている〔・・・〕。マルクスは、『原理』における剰余価値とは結局は生産過程で生まれるものではない「譲渡プロフィット」にすぎないと指摘し、このかぎり「スチュアートは重金主義と重商主義との合理的表現」ととどまる、とした〔・・・〕。この論断は、『原理』を読み通すものには大きい疑問を抱かせるのだが、それはマルクス経済学者一般にこの古典を軽んじさせることになった〔・・・〕。」（同前掲著、14ページ）おそらくこうした事情と裏腹にであろうが、さらに次のような文献的事情が多くの読者を『原理』から遠ざけていた。スミスやリカードの著とは異なって、『原理』は近年まで完全な日本語訳が存在せず、長大で難解な英文を読み通すよほどの覚悟がなければ、一般の読者には容易に近づきがたい古典であったが、最近ようやく新しい研究に基づく全篇の統一的な翻訳が実現しようとしている。われわれ日本の読者にスチュアートが近づきやすいものになったことは、マルクス経済学の研究にとっても歓迎すべきであろう。

2. マルクスの『原理』との出会い

マルクスは生涯に書き残した著作物の多くの箇所ですチュアートの『原理』に直接・間接に言及している（『経済学批判要綱』、『経済学批判』、『剰余価値学説史』、『資本論』、『反デューリング論』第二篇第十章「『批判的歴史』から」、等々）が、これらはいずれも50年代後半に彼が『経済学批判』の体系化の試みを始めてから以降の時期のものである。スミ

スヤリカードやミルなどの場合とは異なって、40年代のマルクスの公刊された著作の中でも現在までに公表されている抜粋ノート・評注のなかでも、以下に述べる一箇所以外ではスチュアートにはまったく触れられていない。ところで、マルクスの読書の記録について現在のところもっとも詳細に報告しているのは新メガの第IV部に収録された各巻であろう。現時点までに刊行されている諸巻によってみるかぎりでは⁽⁴⁾、マルクスがスチュアートの書物について最初に記録しているのは、1845年夏にエンゲルストとともにマンチェスターで行った経済学研究のノート3においてである⁽⁵⁾。しかしこのノート3からは『原理』の存在をマルクスが知っていたこと以外には何も分からない。上に挙げた彼の50年代以降の諸著作に出てくるスチュアートからの引用は初版・ダブリン版・全集版からのものであり、これらはおそらく50年以後のロンドン時代に作成された抜粋によるものであろう。こうした状況証拠からして40年代のマルクスはまだスチュアートを読んでいなかったのではないかとも思われる。ところが、47年前半にフランス語で執筆されたブルードン批判の書『哲学の貧困』の中には彼がスチュアートに言及し『原理』からの引用をフランス語版から行っている箇所がひとつある⁽⁶⁾。ということは、この引用が孫引でないとすれば、以上のような文献的状況からの推測に反して、マルクスは『哲学の貧困』を執筆する以前に『原理』の仏語版を読んでいたということである。45年6月までに彼が渉猟していたイギリスの経済学文献はほとんどすべてフランス語訳であったことを考え合わせれば、マンチェスターで作成したノートに初版本の表題等を書き込む以前に、すでに英語オリジナルではなくフランス語訳で読んでいたとしても、何ら不思議ではない。

ところで、マルクスは彼の経済学研究の初期にどのようにしてスチュアートと遭遇したのであろうか。この点にかんして小林昇は次のように述べている。「フリードリッヒ・リストはその主著『経済学の国民的体系』(1841)のなかで『原理』を批判的に、ただし皮相的に採り上げているが、後述のようにスチュアート再評価の最大の旗手となったマルクスが、その『哲学の貧困』で早くも『原理』に触れているのは、彼が最初に読んだ経済学の本だとされるリストの主著の記憶にかかわるものであるかも知れない。」⁽⁷⁾「マルクスは彼が経済学の研究をはじめたばかりの1844年にリストへの批判をくわだて、翌45年3月ごろに『国民的体系』に対する詳細な批判の手稿を書いているから、『原理』の存在自体は、このもっとも早い時点以来すでにマルクスの知るところだったはずである。」⁽⁸⁾たしかにリストは『国民的体系』のなかのただ一箇所(第二九章)でスチュアートに言及しているが、その内容はきわめて短い批判的論評にすぎずこの箇所を読んだだけでスチュアートが18世紀の重

要なイギリスの経済学者の一人として印象に残るかどうかきわめて疑問である。マルクスの書き残したリストへの「詳細な批判の手稿」が、今世紀70年代始めに原語で公表されその直後に日本語訳も出ている⁽⁹⁾。この手稿でマルクスは、リストが彼の主著のなかで批判的に言及した英仏の経済学者たちについて、独自の研究に基づいて自身でも検討を加えているが、スチュアートにかんしては何も述べていない。また、この手稿の執筆に先立ってブリュッセルに移転する直前の時期（44年末から45年初頭）に作成され、この手稿の前提となったと思われる『国民的体系』からの抜粋ノート⁽¹⁰⁾では、最初から順を追って丁寧に抜き書きが行われているが、スチュアートが出てくる唯一の章である第二十九章に達する前に、第二十七章までで終わっている。これらの事実から確定的な結論を引き出すことはできないが、残された文書資料はリストがマルクスのスチュアートとの出会いの媒介となったことを積極的には語っていない、ということと言えるであろう。さきに注(4)でふれた未公表の資料が利用可能になれば何らかのことが明らかになるかもしれないが、現時点で言いうることは、マルクスはエンゲルスの影響下に経済学研究を開始してから45年中頃までのあいだにフランス語に翻訳されたイギリスの経済学文献の一冊としてスチュアートの『原理』を入手して読んだのではないか、ということまでである。^{(11) (12)}

以上に述べたように、40年代のマルクスがスチュアートとのかかわりを有していたことは間違いなが、資料的な問題も含めて文献的に明確にしえない部分が多く、本稿で扱おうとするテーマについてこれまでマルクス研究の側から検討を加えられたことはなかったようである。筆者は『原理』の新訳刊行の企画（すでに一部実現）に象徴される近年のスチュアートへの関心の高まりに刺激されて、遅まきながら、「全体系の圧縮部分という意味でその基幹部分」⁽¹³⁾をなす第一篇と第二篇を昔買い入れたスキナー編集のアブリッジ版と既訳とをたよりに繙読してみたが、かねてから気になっていた40年代後半のマルクスの経済学的著作（『哲学の貧困』と『賃労働と資本』）の中のいくつかの論点が、スチュアートの理論と深くかかわっているのではないかという思いを新たに、本稿執筆を思い立った次第である。といっても、これらの著作のなかでマルクスは先ほど指摘した一箇所を除くとスチュアートにも『原理』にも表面上はまったくふれていないのであり、後者の前者への影響関係を論じるには、第三者が両者の文章を読み比べてそこにあり得る関係について推論を加えるという、恣意的な解釈の介入しうる余地が大きいきわどい方法にうったえざるをえず、こうした方法による議論にどれだけの説得性を与えるか十分に自信を持ってないところもある。

さて、以下ではマルクスの上記の二つの著作のいくつかの論点が『原理』に含まれるスチュアートの所説と深く関連しあっていることを論じてみたい。『哲学の貧困』は46年に発表されたプルードンの大著『貧困の哲学』の批判を直接の目的とするものであるが、そこには同時にマルクスの経済学上の積極的見解も示されている。本書は「科学上の一発見」と「経済学の形而上学」と題する二つの章からなり、前者では価値論・後者では方法論にかかわる問題が論じられている。経済学の理論的問題を扱った第一章でマルクスは、主としてリカードの理論を対置する形でプルードンの価値論を批判すると同時に前者に強く依存しつつ自己の積極説も述べており、商品・価値・価格・交換・貨幣・需要等々にかんするマルクスの見解が、批判の枠組みに制約されたアドホックな形で提出されている。他方、同じく47年の後半期に書かれた講演原稿『賃労働と資本』は、資本主義的搾取のメカニズムの解明を軸としてこの時期のマルクスの経済学的見解をきわめてコンパクトに要約したものであり、ここでは方法論的問題をのぞいて後に『資本論』で扱われる多くの論点が簡潔に示されている。この書では、価値論とならんで資本主義的剰余（剰余価値）の理論と資本蓄積の理論が中心になっているが、スチュアートの『原理』には19世紀のリカードやマルクスが分析の対象としたような資本・賃労働関係の認識は示されておらず、この論域にかかわる諸問題は比較検討の対象とはなりえない。

それゆえ以下の議論で扱うことになるのは、商品経済の理論的認識にかかわるいくつかの論点である。ここにあらかじめアトランダムに列举しておけば、競争による価格の変動（両面的・三面的競争）、生産費による価値決定、生産費の内部分析、生産費と生産に用いられた労働時間との関連付け（以上第3節）、商品交換における需要（貨幣）の役割、商品交換の非対称的構造、貨幣数量説に対する態度（以上第4節）、等々である。これらはいずれも、スミスやリカードの主流派経済学とスチュアートの貨幣的経済理論とが正面から（ただし、マルクスの表現をかりれば、「抽象的に」）対立する問題場面であり、マルクスは上記の両著作においては表向きはリカードにほぼ全面的に依拠しながら、他方では名指しはしないものの明らかにスチュアートの発想を取り入れている場面もある。この段階のマルクスはいわば両者のあいだで揺れ動いているところがあり、その結果、彼自身の理論的説明のなかには、リカードの価値論が抱えていた難問⁽⁴⁾とともにスチュアートの発想が断片的に持ち込まれることとなった。

注

(4) 残念ながら、45年2月から6月までの時期の読書ノートを収録するMEGA², IV・3がまだ刊行されて

いない——現在刊行準備が進められているが実現までにはなおしばらく時間がかかるとのことである——ために、確定的な判断のための条件が整備されていない。本稿の文脈においてこの時期の詳しい資料が欠けているのはきわめて口惜しいことである。というのは、この時期はマルクスのエンゲルスとのイギリス旅行とマンチェスターでの共同研究（同年7～8月）の直前にあたり、彼が主としてフランス語文献によって（オリジナルが英語の著書の仏訳版も含めて）研究を進めていた最後の時期だからである。この年の7月以降の読書ノートではそれ以前とは対照的に英語文献が主流となってくる。後述するように、45年2月から6月までのフランス語文献による経済学研究の中にスチュアートの仏訳本が含まれていたことも十分考えられる。この点は現時点での資料的制約の問題として、今後の機会に待つほかない。

- (5) Vgl. MEGA⁽²⁾, IV・4, Dietz Verlag, Berlin, 1988, S.190.ここでマルクスはホブズ、ロック、スチュアート、スミス、ローダーテイル、ド・クインシー、ベイリーの順序でそれぞれの著書名を挙げている。スチュアートの『原理』については1767年刊行の初版本が挙げられている。ただし書名だけで抜粋や評注はまったくない。メガ編集者がこの箇所に付した注釈によれば、マルクスは51年頃にロンドンで作成したノートにこの書物からの抜粋を行ったと記されている。Vgl. MEGA², IV・8, Dietz Verlag, Berlin, 1986, S.312-325.すなわち、現在利用可能な資料によるかぎりではマルクスが40年代のうちにスチュアートを読んだ形跡は残されていないのである。なお、新メガにマルクスの読書ノートの全容が公表——額面どおり受けとるとして——されるより早い時期にアムステルダムの社会史国際研究所での独自の調査によって同時期のマルクスの読書ノートについての研究を発表していたリュベルの論文にもスチュアートの名は出てこない（Voir M. Rubel, *Les cahiers de lecture de Karl Marx, I, 1840-1853*, International Review of Social History, Vol. II, No.3.後に同著 *Marx Critique du Marxisme*, Payot, Paris, 1974.に収録）。
- (6) 『哲学の貧困』第二章「経済学の形而上学」の中で、スチュアートが消費税にかんする見解を述べた一節が肯定的に引用されている（Voir Karl Marx, *Oeuvres Economie I*, Gallimard, 1965, p.117.ここでの引用は1789年刊の仏訳版からなされており、引用箇所は『原理』第二篇第二十五章からであるが、英語原文の対応箇所とはやや異なっている。Cf. Sir James Steuart, *An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy*, volume one, edited and with an Introduction by Andrew S. Skinner, published for the Scottish Economic Society by Oliver & Boyd, Edinburgh and London, 1966, p.205）。
- (7) 同著前掲書、10-11ページ。
- (8) 同「マルクスまでのスチュアート——文献史的スケッチ——」、「J・スチュアート新研究」小林昇経済学史著作集X、未来社、1988年、110ページ。
- (9) 「フリードリヒ・リストの著書『政治経済学の国民的体系』について」村田陽一訳、『経済』、1972年9月号。
- (10) MEGA², IV・2, 1981, SS.506-546.
- (11) マルクスの蔵書にスチュアートの仏訳本が含まれていたことはFred E. Schrader, *Restauration und Revolution*, 1980に報告されているし、『マルクス・エンゲルス蔵書目録』にも記されている。この刊本のフルタイトルは次の通りである。Jacques Steuart, *Recherches des principes de l'économie politique; ou essai sur la science de la police intérieure des nations libres....*, T.1-5, Paris, 1789.なお、50年代以降マルクスは英語の各版から『原理』を引用しているが60年代中頃に草稿の書かれた『資本論』第3部の一箇所では同じフランス語版を用いている（Vgl. MEW Bd.25, S.377）。このことは、彼が若いころに入手していたフランス語版から抜粋ノートを作成していたか、あるいはこの版本が強く記憶に残っていて60年代になっても参照していたことを、示唆するものであろう。また、彼は『資本論』

第一部第一章「商品」の始めのほうで「内在的な交換価値」を表現するのに殊更にフランス語で *valeur intrinsèque* という表現を各版で用いている (MEGA², I・5, 1988, S.18. MEW, Bd.23, S.51.)。スチュアートの『原理』を含めて重商主義期のイギリスの経済学文献では *intrinsic value* という表現の使用はめずらしくなかったようである (ペティ、ロック、ダウナント、バーボン、ノース、等々) が、マルクスがこの語をわざわざフランス語で使っているのはカンティロンの『商業試論』によった (第一部の第十章と第十七章の二箇所で使用されている。津田内匠訳、名古屋大学出版会、19ページと70ページ、Kelley のリプリント版では p.26 と p.116) のか、あるいは、『原理』仏訳の記憶と結びついていたのではないかと考えられる (ドイツ語版では *immanenter Tauschwert* の後に括弧して *valeur intrinsèque* と書き加えられているが、フランス語版だけは当該箇所が *valeur d'échange intrinsèque* となっている。Cf. *Oeuvres I*, *ibid.* p.563。フランス語の語彙としては、この用語は貨幣の名目的価値に対する内在的価値すなわち金属実体の純分——*valeur intrinsèque de la monnaie*——を意味するようであるが、マルクスがフランス語版にかぎって *d'échange* を書き加えたのは、フランス語圏の読者を想定してこの混同を回避するためだったのであろうか。もしそうだとすれば後者の可能性が高いと思われる。) 。なお、中世以来の経済学文献における *intrinsic value* という用語の使用とその意味内容の変遷については、平瀬巳之吉『経済学の古典と近代』、時潮社、1954年、220-4 ページの付論を参照。

- (12) リスト経由でのマルクスのスチュアートとの出会いの可能性の他に、40年代の前半にマルクスが深く読み込んだヘーゲルの諸著作が媒介となったことも考えられる。周知のように、青年期のヘーゲルはスミスよりもむしろスチュアートの『原理』を読んで抜粋ノートを作成しており、この研究が後に『法の哲学』の「市民社会」論の展開に大きく関与した。とすればマルクスがヘーゲルを介してスチュアートに接したとしても不思議はない。ただし、ヘーゲルが『法の哲学』の中で名前を挙げている英仏の経済学者の中にはスチュアートは出てこず、ヘーゲル経由にも一般的な可能性以上にこれを証明する確たる事実があるわけではない。
- (13) 小林昇「総説——ジェイムズ・スチュアートと経済学原理」、『J・スチュアート研究』小林昇経済学史著作集V、未来社、1977年、35ページ。
- (14) 40年代後半期のマルクスがいかにリカードに傾倒していたか、その結果ここにいう難問がマルクスのテキストの中でどのように再現されているかについては、注(1)に掲げた拙稿の183-194ページを参照されたい。本稿ではこの点には特に立ち入らない。

3. 需要と供給、買い手と売り手の競争

40年代の前半にマルクスを経済学研究に導いたのはエンゲルスであったが、彼の「国民経済学批判大綱」は商品価格が無政府的な競争によって無秩序に変動することを根拠に、市場交換に一定の秩序を想定する古典派の労働価値論を全面否定するものであった。マルクスもこれにならって古典派に対して同様の立場をとっていたが、両者の共同執筆による『ドイツ・イデオロギー』の時期あたりを境界として古典派に対する評価を一転させ、労働価値論を全面的に受容した。しかしこうした理論的立場の急変にもかかわらず、40年代のマルクスの経済学的著述の中では一貫して競争過程に対して強い関心が払われている。これは、50年代の『経済学批判要綱』より後の体系化志向の本格化した時期における競争の

取り扱い（まず競争を捨象した「資本一般」の枠組みで理論を組み立て、競争は「体系」の後のほうにおしやって直接には論じない）とは顕著な対照をなしている。前節末に挙げた二つの著作では、競争は「生産費」（一？→「労働時間」）による商品価値（価格）の規定を実現させる媒介者としての役割を与えられているが、ここでマルクスが行っている競争の分析は、スチュアートが『原理』第二篇の第七章「両面的競争 [double competition] について」を中心とする諸章で提出している学説史上きわめてユニークな競争分析を前提にしているように思われる。

以上のような筆者の立言が単にマルクスの一時的な思いつきをとらえてのものではなく、この時期の彼の思考のなかに定着していた発想に根拠をもつものであることを示すために、両方の著書から関連箇所を引用してみよう。『哲学の貧困』では彼はプルードンの競争観を批判しつつ次のように述べている。

「彼〔プルードン〕は抽象を極限にまでおし進めて、すべての生産者をただ一人の生産者に、すべての消費者をただ一人の消費者に溶解し、そして、これら二人の架空の人物に闘いを行わせる。しかし、現実の世界では、物事はこのようには進行しない。供給するもののあいだの競争と需要するもののあいだの競争は、売買価値 [valeur vénale——商取引の対象としての物の価値、すなわち商品価値、というほどの意味] がそこから生じる買い手と売り手のあいだの競争の必要な一要素をなすのである。」(Karl Marx, *Misère de la philosophie*, *ibid.*, p.19. 強調は原文) つまり、商品取引における競争は買い手と売り手の二つの側のあいだで闘わされるが、必ずしもそれぞれの側が結束して相手側にあたるのではなく、それぞれの内部にも競争関係が存在するのであり、これが双方のあいだの競争の必要な要素をなしている、ということである。

『賃労働と資本』では、労働（力）という特殊な商品の価格としての労働賃金がいかにして決定されるかという問題を解くに先立って、まず商品一般の価格がどのように決定されるかというより基本的な問題を論じるという文脈の中で、商品価格を一定の水準に収斂させる機構として、『哲学の貧困』の上記のアイデアが次のように展開されている。

「商品の価格を決定する競争は三面的 (*dreiseitig*) である。／同じ商品が種々の売り手によって提供される。同じ品質の商品をもっとも安く売る人は、確実に、他の売り手たちを追い出して自分に最大の販路を確保することができる。だから売り手たちは、相互に販路を、市場を争いあう。〔・・・〕そこで売り手のあいだの競争が生じるのであり、この競争は彼らが提供する商品の価格を引き下げる。／だが買い手のあいだにも競争が生じるので

あり、この競争の方は提供される商品の価格を引き上げる。／最後に、買い手と売り手のあいだに競争が生じる。一方はできるだけ安く買おうとし、他方はできるだけ高く売ろうとする。買い手と売り手のあいだのこの競争の結果は、競争の上述の二つの側がいかなる関係にあるか、すなわち、買い手たちの隊内の競争と売り手たちの隊内の競争のどちらが強いかに依存するであろう。」(Karl Marx, *Lohnarbeit und Kapital*, MEW, Bd. 6, S.402. /はパラグラフのかわり目。強調は原文)

売り手側と買い手側の競争では、相手側に対して求めるもの（前者は需要と購買、後者は供給と販売）の数量が少ない側の方が有利な立場を占めることになり、その逆は逆である。綿花の取引にあたって需要と供給の比率が10対1であったとすると、二つの側の関係は次のようになるであろう。「綿花の売り手たちは、敵の軍隊の軍勢が相互に猛烈に闘っているのを見てとり、100バレン全部の販売がすっかり保障されているので、敵たちがお互いに競い合って綿花の価格を競り上げているときに、お互いに争いあってこの価格を押し下げることのないように用心するであろう。そこで突然に売り手の軍隊に平和が訪れる。彼らは一人の人間のように買い手に向かい合い、哲学的に腕組みをし、そして、ぜひとも買いたがっている人の付け値自体にこれ以上はだめだという限度がないとすれば、彼らの要求には制限がないであろう。／だから、ある商品の供給がこの商品に対する需要よりも小さければ、売り手のあいだではわずかの競争しか生じないかまたは競争はまったく生じない。この競争が減少するのと同じ割合で、買い手のあいだの競争が増大する。その結果は、商品価格の多かれ少なかれ著しい上昇である。」(Ebenda, S.403. 強調は原文)

以上の二つの引用文には、マルクスの経済学的著作のおそらく他のどこにも論じられていないと思われる「三面的競争」という、きわめて独特な競争論が展開されている。まず上の引用文の内容だけについて検討してみよう。競争が三面的だというのは、競争が1. 買い手のあいだ、2. 売り手のあいだ、3. 双方のあいだ、で闘わされるからである（以下の議論では、競争1、競争2、競争3とよぶことにする）。

競争1と2は、それぞれの側の個々の当事者が反対側に向かって自分と同じ側にいる競争者を出し抜こうとして行う競争であり、この競争は自分の属する側が反対側に対して弱い立場にあるときにのみ生じる。ここでは同じ側にいる当事者間の利害が複数に分裂した状態にある。競争1は価格を引き上げる方向に、競争2は価格を引き下げる方向に作用する。ところが、競争3では買い手側は逆に価格を引き下げようとし売り手側も逆に価格を引き上げようとする（つまり、相手側が内部競争において行っているのと同じことをしよ

うとするのである)。この競争は双方のうちの強い立場にある側の当事者たちが歩調を合わせてあたかも「一人の人間のように」結合して相手の側に対してしかけるものであり、この場合、弱い立場にある相手の側の当事者間の利害は必ず分裂状態にあるはずである。したがって、競争3は両方の側が同時に価格を逆方向に動かそうとする力を発動するということ（『哲学の貧困』からの先の引用文でマルクスがプルドンの理論として批判している、ひと塊になった買い手と同じくひと塊になった売り手の一対一の闘い）、を意味するのではない。

だから、「三面的競争」といっても競争1・2・3が同時に闘わされるわけではなく、競争1と3あるいは競争2と3という組み合わせのみが可能であり、競争3が欠けた競争1と2だけの組み合わせはあり得ない（内部競争は相手側あってこそのものである）。すなわち、買い手側と売り手側のあいだに競争が存在する場合でも、競争しあう二つの側の内部での競争は常に一方にしか存在しないし必ず一方には存在するのである。（こころみに、双方の側の力が等しいケースを想定してみよう。すなわち、競争3が消滅することによって競争1も2も消滅する、つまり力の均衡によって表面上競争がなくなる状態を考えてみよう——均衡しあう力が双方に存続しているからこそこういう状態があるのであり、競争による需給量と価格との運動の静止は、力そのものがなくなることを意味するのではない——。ここでは、売り手側にも買い手側にも、利害の分裂した個々の当事者が他を出し抜いて、より強い相手の側に競って取り入ろうとする内部競争は存在しないはずである。これは供給量と需要量が等しくなって、どちらもが相手側に対して優勢にも劣勢にもない状態であろう。ただし、一方の側に内部競争が消えるのは、相手側の内部に激しい競争があるのを見て——自己の側に有利な価格の激しい動きとして感知される——当事者たちが相互の張り合いを止めることによるのであるが、しかし競争3が消滅した均衡状態にはこのような前提が欠けているので、マルクスの上記の議論からすれば、こうした力のバランスはありうるとしてもきわめて不安定なものでしかないはずである。）

ところで、スチュアートは『原理』第二篇の始めのほうの諸章で、インダストリとともに発展する商品流通の機構にかんして種々の角度から考察を加えているが、そこで彼が行っている競争の分析が、上に見たような40年代後期のマルクスの「三面的競争」論に強い示唆を与えているように思われる。といっても、先に引用した二つの著作では競争分析についてスチュアートが直接言及されているわけではなく、このような立言はあくまでも筆者の推測でしかない。そこで次に、スチュアートが『原理』で展開している学説史上きわ

28(28)

めてユニークな議論を以上のマルクスの競争分析と対比してみて、いくらかでもこの推測に裏付けを与えることができればと考える。ただし、本稿はスチュアートの『原理』についての専門的な研究ではないので、独特のこみいった用語（概念）体系を有する『原理』の検討はマルクスとの対比にとって必要なかぎりにとどめ、『原理』の論脈に深入りして本稿の議論の筋をいたずらに複雑にすることは避けたい⁽¹⁵⁾。

第二章「需要について」には次のように述べられている。「需要は単純か複合的か (either simple or compound) である。需要者がただ一人のとき単純であり、需要者がこれより多いとき複合的である。しかしこれは人数 (persons) よりも利害 (interests) に関係するところが大きい。同一の定まった利害から需要している20人は、ひとつの単純な需要をかたちづくるにすぎない。さまざまな利害が競争を生むとき、需要は複合的または高い需要 (high demand)⁽¹⁶⁾になる。それゆえ買い手のあいだに競争がなければ、需要量の大小にかかわらず、買い手の多少にかかわらず、需要は単純だと言えるだろう。」⁽¹⁷⁾ (Sir James Steuart, *An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy*, edited and with an Introduction by Andrew S. Skinner, published for the Scottish Economic Society by Oliver & Boyd, Edinburgh and London, 1966, p.152. 訳文は中野 正訳の岩波文庫版を参照して引用者が作成。強調部分はすべて原文のもの。以下同様)

また第七章「両面的競争について」の冒頭には次のように述べられている。「取引の一方の側で他方の側よりも競争がはるかに強いとき、私はこれを単純とよぶがこれは私が複合的需要とよんだものと同義である。これは高い需要という用語に含意される種類の競争、すなわち、需要は価格を引き上げると言われる場合の競争である。/両面的競争 (double competition) というのは、競争がある程度取引の両方の側に同時に起こる場合、つまり競争が一方から他方へと交互に振動する (vibrates alternately) 場合である。これは価格を商品の妥当な価値に抑えるものである。」 (ibid., p.172) 「単純な競争は、買い手のあいだの複合的または高い需要と同じであるが、売り手のあいだにも同じように起こり (これは複合的需要にはありえない)、こうして反対の効果を生み出すかぎりでは、複合的需要とは異なる。それは価格を低下させるのであり、低い需要と同義である。仕事と需要のバランスを転覆させる (overturns the balance of work and demand) のは、この競争である。[...] 両面的競争は、トレードのほとんどあらゆる活動に起こるものと理解される。これこそ価格の過度の上昇を阻止するものであり、その過度の下落を防ぐものである。両面的競争が行われているかぎり、バランスは完全であり、トレードとインダストリは繁栄す

る。」(ibid., p.172-3)

以上の二つの引用文に市場での競争の構造にかんするスチュアートの理解がきわめて定義的に述べられている⁽¹⁸⁾。スチュアートが市場を観察する視座は、自己の商品(製品 work)を販売しようとしている売り手・供給側(独立の生産者たる職人 workman または G-W-G の第二局面にある商人)の立場に設定されている。このため、彼の視線はいきおい買い手(需要側)の方ばかりに注がれがちになり、売り手(供給側)の観察はやや手薄になっているような印象を与える。このように読むならば上掲の引用文も理解しやすくなるであろう。

スチュアートは需要側を需要総量としてだけ対供給の関係において観察するよりも、むしろ、買い手側内部の状態に目を向ける。それぞれの買い手は、供給量が少ない(品薄)と感じれば他の買い手と競って(他に先んじて、または、他よりも買値を引き上げて)でもめざす商品を手に入しようとするが、一定の価格で自分の需要する商品を確実に入手できる見込みが大きいと感じれば、他の買い手と競うよりもむしろ歩調を合わせて売り手側に対処しようとするであろう。前者の状態が複合的な需要(価格引き上げ効果をもつ「高い需要」)、後者の状態が単純な需要(価格引き下げ効果をもつ「低い需要」とよばれるものである。複合的な需要にあっては買い手側の利害(interests)が分裂していて相互の争いが存在し、単純な需要ではその反対に、あたかも「需要者がただ一人」であるかのように買い手のあいだの利害が一致し、対売り手側行動は協調的である。このように、スチュアートが注目するのは買い手の人数の多い少ないや需要量の大小というよりも、むしろ、売り手側と対峙する買い手どうしのふるまいの方である。

ところで、彼の議論の表面には出てこないが、需要は供給あつての需要であり、買い手相互のふるまいには当然のことながら、売り手側の対買い手側および売り手相互のふるまいが対応していると考えられる。すなわち、形式論的に言うと、複合的な(高い)需要は裏返せば単純な(低い)供給を意味し、反対に単純な(低い)需要は同時に複合的な(高い)供給を意味するであろう。もちろんスチュアート自身は、供給側にかんしてこれらの用語を使用した考察は全然行っていないが、実質的には需要についての議論のなかに含意されていると考えてよいであろう。また、二つの形容詞の組み合わせの需要と供給の両側での逆対応関係は必ずしも一意的なものではなく、相対的に高い(低い)、相対的に複合的(単純)という関係が、シーソーのように反対方向に運動するというようなイメージで捉えられていると思われる。

さて、売りと買いのそれぞれの側の内部での競争は、二つの側のあいだの競争の一部としてのみ存在しうるものである。先の『原理』第二篇第七章からの引用文はこの二つの側のあいだの競争について論じているが、スチュアートはここでも、供給側にかんしてはかろうじて「取引の両方の側」という表現でその存在にふれているにすぎず、もっぱら需要の側に視線をあてて議論をはこんでいる（このため、彼の定義的な議論の組み立てからしてもやや奇妙な感じのする言い回しも見られる）。彼は需要と供給を対等で対称的な理論的扱いの対象とはしていないのである。それはともかく、複合的な需要は高い需要を意味し、またこれは買い手の内部にのみ競争が存在するか、または、買い手の内部の競争の方が売り手の内部の競争よりもはるかに強い、ということの意味する（裏返せば、単純な低い供給であり、売り手が単一の利害に結合している状態、その結果は価格の上昇）。先の引用文ではスチュアートはこれを「単純な競争」と名づけているが、この競争が需給の一方の側だけに存在する競争を意味するのであれば、なにもこれを需要側のみにかかわる事態とする理由はなく、供給側にも単純な競争の可能性を想定しなければならないであろう（複合的な高い供給、単純な低い需要、買い手の利害が一つになっている状態、その結果は価格の下落。スチュアートの論理は当然にもこうした想定を含むものである）。彼はこのように、買い手か売り手のいずれかの側の内部だけで競争が行われる状態を単純な競争と名づけるのであるが、こうした競争が持続するということは需給いずれかの側の力が他方を圧倒しつつけるということであり、その結果は商品価格の持続的な上昇ないし下落であろう。これを彼は需給「バランスの転覆」とよぶ⁽¹⁹⁾。

さて、以上のように単純な競争が一方の側だけに持続的に起こり他方の側には相対的に競争のない状態が続くというケースとは異なって、「競争がある程度取引の両方の側に同時に起こる場合、つまり競争が一方から他方へと交互に振動する場合」をスチュアートは「両面的競争」とよぶ。ここでは買い手側の力と売り手側の力の関係（需給関係）は天秤が左右に揺れるようにして緩慢に振動し、これにつれて価格も同じく上下にゆるやかに振動する。こうして需要供給量も価格もあるレベルを中心にして緩慢に変動し、価格の一方的な上昇または下落が続いたり需給量の乖離が際限なく拡大するという不均衡の状態は発生しない。だから両面的競争とは単純な競争の起こる側が交互に入れ代わることなのである。スチュアートは、単純な競争の持続ではなく両面的競争こそが経済の均衡をもたらすのであり、前者を回避して後者を経済外的な力（為政者の介入）によって維持しなければならない、とするのであるが、彼の定義中心的な論述（注(18)参照）は、いかなる場合に単純な

競争が持続するのか、またいかなる場合に競争が両面的になるのかを明確にしていないうに思われる。

これまでかなりの紙幅を費やして「両面的競争」という概念に集約されるスチュアートの競争分析の一端を見てきたが、先に検討したマルクスの「三面的競争」論は前者の独特な発想方法から強い示唆を受けていると思われる。もちろんそれは、まずスチュアートが示した競争の「両面（二面）的」（原語では double であり、文字通りには「二面的」というよりむしろ「二重的」とすべきであろうが）性格に、マルクスがさらに別の一面を付加して発展させ、もって「三面的」競争という概念を作り上げた、というような機械的な関係ではなく、問題は二面か三面かという単純な数字上の比較にあるのではない。競争の性格を表現するために両者が使用する「両面的」とか「三面的」とかいう言葉は、同一平面上で比較しうる数をあらわしているのではない。そうではなく、この両者が商品取引における競争の関係を、買い手と売り手（需要と供給）の双方の内部での競争と双方のあいだの競争とに分析して吟味し、その相互関係の相の下に競争の全体的な機能の仕方を解明するという、競争過程を考察する方法そのものにおいて、スチュアートとマルクスのあいだに影響関係が見いだされるのではないかと思われるのである。すなわち、スチュアートがこうした競争分析の方法を学説史上最初に提示したとすれば、彼の考える競争もまたマルクスのそれと同様に「三面的」だということもできるし、あるいはその反対に、需給バランスの交替をとおして価格が一定レベルをめぐって上下に変動することを説くマルクスの競争（後述）も、スチュアートと同様に「両面的」だということも可能であろう。

とはいえ、マルクスの競争分析がスチュアートのそれと近い関係にあるのはこの点までである。スチュアートのいう「両面的競争」がいかに機能すると考えられているか、また、マルクスが需給双方の力関係の交差的な変動（いわば「マルクスの両面的競争」）をつうじて商品価格がいかにしてある特定の水準に規制されると考えているか、という問題場面にいたると両者は異なる方向に分岐していくことになる。

スチュアートは『原理』第二篇第十章「仕事と需要のバランスについて」で、先にその概要を見たバランスの転覆の次第を次のように説明している。「職人たちが競争して売ようになる前に両面的競争が回復されるならば、私が短期の振動 (*short vibration*) とよぶもの（これはけっして転覆ではない）の後に、天秤は再び水平にもどるであろう。しかし仕事の方の秤皿があまりにながく同じ位置にとどまり、そして、一方の側だけに強烈で有害でしかも永続的な競争が起こるならば、そのときは、天秤が引っ繰り返される (*overturn-*32(32)

ed) とわたしは言う。なぜならこれは妥当な利潤 (reasonable profits) を減少させ、またはおそらく、実際、職人に原価 (prime cost) 以下で売ることをよぎなくさせるからだ。その結果、職人は苦境におちいり、またインダストリは沈滞させられる。」(Steuart, *An Inquiry...*, 前掲スキナー版, p.191-2.) 「需要者のあいだだけに競争が起こり、これが利潤を引き上げるであろう。このさいもし、短期の振動の後に、為政者の配慮 (statesman's care) によって、供給が増加することになれば、なんの害も生じないであろう。競争は側を替えるだろう、そして利潤はふたたび完全な水準へ下がってくるであろう。」(ibid. p.192) また、同篇第三十一章の第十章の要約部分には次のように述べられている。「仕事と需要が比例しているとき、天秤は両面的競争の影響の下に振動する。トレードとインダストリ〔第二篇の主題〕は繁栄する。しかし自然的な原因の作用はこの均衡を破壊するにちがないので、為政者の手がこの均衡を保持するためにたえず必要となる。」(Steuart, *the Works*, Vol. II, 1805, Ch. XXXI, p.223, 以上強調はすべて原文)

これらの文章に示されているように、スチュアートは、「両面的競争」が天秤を左右にゆっくりと小幅に動揺させて転覆を回避させている状態が望ましいとしてこれを求めつつも、しかし、単純な競争をその自然のなりゆきのままに放置 (Cf. Steuart, *An Inquiry...*, 前掲スキナー版, p.193) しておけば、需要と供給 (仕事 work) のバランスは自然に崩れる (転覆する) ものと考えていた。しかも、一定の限度を超えて傾いてしまった秤とちょうど同じように、崩れた需給バランスには自己回復力はそなわっておらず、経済過程の外部にあって絶えず経済の自然な動向に一定の歯止めをかけて均衡を維持する役割を担う、為政者の配慮 (statesman's care) が不可欠とされているのである。このケアがなければ、商品経済の過程は均衡を維持しつつ作動を継続してゆくことができないのである。すなわち、需要の不足が続けば当該商品を供給する職人たちは販売困難ないし商品価格の低下が持続することから「苦境」に陥るのであるが、スチュアートの理論ではここで彼らが自力での窮状を脱する可能性は考えられないのである。彼らは販路の不足のために二束三文での販売にあまんじて損失を減らすために生産を縮小すること (インダストリの沈滞) をよぎなくされるが、彼ら自身にはこうした状態を改善するいかなる方途も閉ざされているとされるのである。あたかも、独立自営の商品生産者である職人には特定の製品を生産する仕事しかできないと想定されているものようである。

需要が小さくなって販路が縮小した仕事 (産業部門) の売り手側は、そうでない他の部門の売り手側に対して相対的に不利な状況にあり、逆に需要が増大して販路が拡大した産

業部門の供給側は他の部門の供給側に対して相対的に有利な状況にある。商品生産における産業部門（仕事）の選択と移動は、供給（職人）の側にとっての需給関係の有利さ（供給の需要に対する小ささ）を基準として行われるはずであるが、スチュアートの理論はこうした問題についてまったくふれるところがない。彼の叙述を追ってゆくと、あたかも特定の職人は特定の業種にあって仕事をし続けるものと考えられているかのような印象をうける。もしそうだとするならば、スチュアートの競争の理論は部門内部での競争過程についての分析ではあっても、異なる部門のあいだの競争は対象外とする（ないし、このような競争の存在自体を無視する——あるいは知らない——）ものである、ということになるであろう。産業部門間に自由な競争が存在すると仮定すれば、ある部門内部での「単純な競争」において強い立場をしめる売り手の側は、他の部門の売り手の側とのあいだの競争においては逆に弱い立場に立たされることになる。つまりこの場合、他の部門の売り手（生産者）⁽²⁰⁾は、相対的に不利な自分の部門を去ってこの有利な部門に流入してくるであろう。逆の場合は逆であろう。このような部門間関係を介して、それぞれの部門内部での需給の天秤の傾斜は一定の範囲内に抑えられ、転覆は回避されるはずであろう。

スチュアートの「両面的競争」の理論は、以上のような部門間調整によって一定の価格水準の維持を考えるものではなく、あくまでも、望ましいがしかし経済過程の自然の成り行きを放置しては実現が困難な、特定部門内部でのバランスの振動の理論である。ところで、上述のような部門間競争という発想は、スミスやリカードといった古典派経済学のものであり（特に『諸国民の富』第一篇第七章の自然価格と市場価格の理論に典型的に示される）、古典派経済学にとっては、商品生産は状況に応じた生産量の任意の増減と生産者たちの部門間の自由な移動を根本的な前提とするものであったのであり、この前提の下でこそ商品価値について論じることができると了解されていた（リカードは『経済学および課税の原理』の冒頭で、彼の価値論が対象としうる商品をこのように限定している）。この限りでは、40年代後半期のマルクスも古典派的発想を採用していたと考えられる⁽²¹⁾。

マルクスは（労働力ではなく）商品一般の価格について論じるにあたってまず、「商品の価格は何によって決定されるか」と自問し、「買い手と売り手との競争によって」（Karl Marx, *Lohnarbeit und Kapital*, ebenda, S. 402）と自ら回答し、そしてこの回答の展開として先に見た「三面的競争」論を提起して、こうした競争から一定の水準の価格が結果する次第を説明した。彼は今度は逆に、この価格水準そのものが競争のあり方を規制する（スチュアート流に言えば、「単純な競争」が生じる側を入れ換えて、経済の内生的な論

理のみをもって「両面的競争」を可能にする）点に問題を移行させ、結局価格（価値）は究極的には生産費をつうじて決定され、そしてこの生産費はつまるところ生産に要した労働時間に帰着する、と主張する。こうした価格（価値）決定理論の全体において、競争は最終的な決定要因ではなく決定を実現する媒介者の位置を与えられることになる。

「三面的競争」論に続く部分には次のように述べられている。「需要と供給の割合が変動するにつれて、あるときは価格の騰貴があるときはその下落が、あるときは高い価格があるときは低い価格が生じる。[・・・] ある商品の価格の騰貴の結果は何であろうか。大量の資本が隆盛な産業部門に投ぜられるであろう、そして、他よりも有利な産業領域への諸資本のこの流入は、この産業が通常の利得〔Gewinne〕を生み出すまで、あるいはむしろ、その生産物の価格が過剰生産によって生産費〔Produktionskosten〕以下にまで沈み込むまで、ずっと続くであろう。」(ebenda, S.404) 反対に価格が生産費以下に下落した場合には当該部門からの資本の流出が起こり価格が上昇するであろう。「このように諸資本はある産業領域から別の産業領域にたえず流出入する。価格が高ければ過度の流入が、価格が低ければ過度の流出が生じる。」(ebenda) 「供給と需要の変動は商品の価格をくりかえし生産費につれもどす。たしかに、ある商品の現実の価格はつねに生産費以上か以下にあるが、しかし、騰貴と下落は相互に補完しあうのであって、一定の期間内における産業の干満を合計するならば、諸商品はその生産費に応じて相互に交換され、したがってその価格は生産費によって決定されるのである。」(ebenda, S.405)

以上は、古典派やマルクスの経済学的思考になじんだ者にはきわめて常識的な理論であって、ことさら論じるべき問題点もないように思われるが、本稿のこれまでの論脈からして必要最小限のコメントのみをはさんでおきたい。マルクスはこの点にいたるとスチュアートから決定的に離れて、事実上スミスやリカードの（最初から資本・賃労働モデルに立脚した）自然価格の理論を採用している。上の引用文でマルクスが述べていることは、商品価格が、競争（諸資本の部門間移動）を介して生産費を基準とする自然価格を重心として上下運動をくりかえし、長期平均的にみれば自然価格に収斂する、という古典派の価格理論と同一の構造になっている。そして、マルクスはこの生産費を結局は生産に用いられた労働時間に帰着させる。「生産費による価格の規定は、商品の生産に必要とされる労働時間による価格の規定にひとしい。というのは生産費は次のものから成り立っているからである。1、原料および用具、すなわち、その生産に一定の多いさの労働日を要した産業の生産物、したがってこれは一定量の労働時間をあらわす。2、直接の労働、その尺度はお

なじく時間である。」⁽²²⁾ (*ebenda*, S.405-6)生産費はここで諸構成要素に分解され、そのおのおのが労働時間に帰着させられており、これらの均質な諸要素を合計してひとつの大きさが構成されている。ここでマルクスがあげている商品価値を構成する二つの労働時間要素は、リカードによる間接労働と直接労働の区別に対応するものであろう⁽²³⁾ (リカードの『原理 (第三版)』第一章第三節を参照)。18世紀のイギリスに比べて経済的発展の遅れた大陸の実情をつぶさに観察しつづけたスチュアートが、資本主義生成以前の自由な部門間移動もままならない独立小商品生産者モデルに立脚して部門内競争に躊躇していたのに対して、19世紀中葉のマルクスはイギリス古典派の資本主義分析を受け入れて、生産費 (→労働時間) による価格決定を部門内部と部門間の競争が媒介するという理論構成を採用し、経済過程の運動そのものがある一定の価格水準を保つ傾向を内生的に実現するという古典派的な見解を示しているのである。

注

- (15) 『原理』全体についてのまとまった研究としては、小林 昇『J・スチュアート研究』、『J・スチュアート新研究』(同経済学史著作集V・X、未来社、1977年、1988年)、同前掲書、川島信義『スチュアート研究』(未来社、1972年)、田添京二『サー・ジェームズ・スチュアートの経済学』(八朔社、1990年)、竹本 洋『経済学体系の創成』(名古屋大学出版会、1995年)を参照。なお、本稿で取り上げようとする『原理』の競争論について特に立ち入って論じた研究はあまりないようであるが、特異な視角からする研究論文として次の文献を挙げておきたい。Antoine Rebeyrol, *Marché et marchand chez sir James Steuart*, Cahiers d'économie politique, No.7, PUF, 1982.
- (16) スチュアートは需要の程度を表すのに、高い・低いとならんで大きい・小さいという表現を用いて、需要のあり方に細かい分析を加えている。この二つの区別は主に供給量との相関における需要の大きさの変化の仕方の相違にかかわるものようである。すなわち、高い需要・低い需要は需要量の変化に対応した供給側の量的調整が追いつけないほど急速な変化(または、この量的調整が実際に行われうるよりも短いタイムスパンを観察するかぎりでの、供給に比しての需要の大小)をあらわし、価格の高騰または下落を引き起こす。これに対して大きい需要・小さい需要は、それに量的に対応する供給が存在する場合か、または、供給側の量的調整を伴いうるほど需要量が緩やかに変化する場合をあらわし、価格の変動ではなく取引量の変動を引き起こすものである。「需要の漸次的な増加の性質は、供給を増加させることによりインダストリを奨励することである。需要の突然の増加のそれは価格を上昇させることである。」(Sir James Steuart, *An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy*, the Works, Vol. II, 1805, Ch. XXXI, Recapitulation of the Second Book, p.215.) 前述のマルクスの「三面的競争」における需要(および供給)の量的側面はスチュアートのこの区分にしたがえば高い・低いの方にあたる。本稿で検討しようとしているマルクスの競争と価格変動の議論は、同一部門内部での競争が問題となるかぎり、もっぱらこの次元にのみかかわるものであるが、後に見るように、問題が部門間の競争に移行すると、生産量の調整が可能なタイムスパンも視野に入ってくることになる。だが、これも後に見るように、スチュアートの理論では需給の調整はあくまでも各個別部門の内部で——しかも、経済外的な力の助けをもって——行われるのであり、需要の高低・大小はどちらも同じく部門内の関係を示

すものとされるのである。

- (17) スチュアートは『原理』で需要については詳細な分析を与えているのに供給のことはほとんど論じていない(もっとも、第二章にかんしてはそのタイトルからして当然のことではあろうが)。しかし、需要と供給が対称的に向かい合う市場構造を想定する者からすれば、ここで彼が「単純」・「複合的」という区別をもうけて需要側のあり方に関連して述べている事柄は、そのまま供給側にもあてはまりそうに思えるであろう。ところが、需要と供給の対称性という発想を採らないスチュアートにとっては、需要について述べたことが方向を逆にすればそのまま供給についても妥当するということには必ずしもならないようである。また、供給(supply)という用語そのものの使用例が『原理』にはきわめて少ないが、これは彼が意識的にこの用語の使用を避けていたことにもよる。「需要と供給の比例の考察〔・・・〕そのさい私は、供給という語よりも仕事(*work*)という語を選んだ。なぜかといえば、職人(*workman*)の諸利害が主としてわれわれの考察の対象となるものだからである。」(Steuart, the Works, Vol. II, 1805, Ch. XXXI, p. 222)
- (18) この箇所にかぎらず、「定義中心で機能分析を僅かにしか展開していない」(大森郁夫「サー・ジェイムズ・スチュアートにおける均衡概念の発見」、早坂 忠編『古典派経済学研究』(III)、雄松堂出版、1986年、45ページ)のが『原理』の叙述上のひとつの特色であり、これが市場メカニズムの動態についてのスチュアートの考え方を理解しにくくしている。
- (19) 『原理』の文面にはバランス(天秤)、秤皿、振動、転覆、平衡といった言葉が随所に使用されているが、これは、経済の拮抗しあう諸力を天秤の両側にかかる重さにみたてるという比喩的な論法をスチュアートが採用しているからである。さまざまな経済量が天秤の両方の秤皿に乗せられて秤量されるのである。ついでに言えば、左右の秤皿に乗る諸量は相互に比較される(対称的な)関係にあることもあれば、一方が基(標準)となって他方を評定する(非対称的な)関係にあることもありうる。
- (20) ここでは売り手はもっぱら生産者であるとして議論を進めているが、スチュアート『原理』第二篇ではその表題「トレードとインダストリ」が示すとおり農工分離による商品生産の展開過程は同時に商人(*merchant*)という媒介者の層とその活動部面が発展する過程でもあり、この点の分析にも著者は多くの力を注いでいる(スチュアートによる貨幣的な商品交換の理論では、商人がきわめて大きな役割を演じており、彼らが形成する「商人市場」が商品取引全般に重大な働きをするものとされている。竹本前掲書第二章第二節「釣り合いの経済理論」ではこの点について興味深い指摘がなされている。また、注(15)に挙げた Antoine Rebevol の論文もスチュアート『原理』の商人市場の機能に注目した分析を行っている。)。そうだとすれば、彼の議論の脈絡においては、売り手は販売対象たる商品の生産者であることもあるし、「(高く) 売るために (安く) 買う」ことを業とする商人であることもありうる。ところで、部門間競争は、生産者にとっては別の種類の商品の製造に従事することすなわち「転職」であるが、商人にとっては同一職種にとどまりつつ取り扱う品物を変更することにすぎない、というようにそれぞれの階層にとって「部門間競争」のあり方は大きくことなると考えられる。しかし、マルクスとの対比のために、ここでは売り手は即そのまま直接生産者であるものと前提し、商人層の介在にともなう問題についてはとりあえず棚上げとしておく(なお、商人の役割はマルクスもきわめて重視するところであった。本稿の対象からは外れるが、彼は『経済学批判要綱』でも『61-63年草稿』でも——ある箇所ではスチュアートの所説をも参照しつつ——商人の役割について再三論究している。次の諸箇所を参照。MEGA², II・1, S. 82-3, S. 411, S. 524, S. 718-9, S. 721. MEGA², II・3, S. 25-6, S. 1549-50, S. 1555, S. 1596.)。
- (21) 40年代前半にはマルクスはこの反対に、エンゲルス(『国民経済学批判大綱』)とともに競争がむしろ経済秩序の形成を阻害するという側面のみを強調し、自由競争のこうした作用を根拠に古典派の労働価

値説(一定の秩序の形成の理論)を批判していた。この点については、佐藤金三郎「競争と過剰人口——エンゲルス『国民経済学批判大綱』を中心として」(『経済学雑誌』、42巻6号)、および、前掲拙稿の168-175ページを参照されたい。

- (22) 『賃労働と資本』の中でマルクスが生産費の内実を明示しているのはこの箇所だけであるが、彼はこの著書の他のいくつかの箇所とともに同じく40年代後半期の著作である『哲学の貧困』でも、生産費をもって価値を決定するものとし、生産費は究極的には労働時間に帰着すると述べている。彼のいう生産費の内実にもこれと労働時間とのリンクの論理にも多くの問題があり、それらの問題はつまるところリカード価値論の問題点に淵源すると考えられるが、この点は本稿の主題から外れるので指摘のみにとどめる(前掲拙稿188-194ページを参照されたい)。この時期のマルクスはそこまでリカード理論に傾倒していたのである。労働者を前にした啓蒙的・煽動的講演の原稿である『賃労働と資本』には個々の経済学者の理論や文献への表立った言及はないが、反対に当時のマルクスの経済学研究の跡を各所に見て取ることのできる『哲学の貧困』ではリカードに対して、後のマルクスの立場からは行き過ぎとも思われるほどのほとんど手ばなしの高い評価を与えている。Cf. *Misère de la philosophie*, *ibid.*, pp. 21-25.
- (23) スチュアートも『原理』第二篇第四章「いかにして財貨の価格はトレードによって決定されるか」の中で「商品の実質的価値〔real value〕」を定める要素として三つのものをあげてそれぞれに説明を加えており、彼なりの生産費(原価 prime cost)の理論を提出している。ところが、これらの要素の相互関係は、マルクス(またはリカード)の場合と同じように全体を合計して商品価値をなすものであるのか、また、これらはすべて一様な労働時間に還元されると考えられていたのか(と解釈してよいのか)、といった点に極度の難問を含むものであり、また、この原価に対する剰余(利潤)の位置づけは研究史多くの専門研究者が議論を積み重ねてきた論点でもあって、本稿では到底取り扱うことは叶わない(この問題にかんする文献として、小林 昇「『原理』における利潤について」、同前掲書『J. スチュアート研究』所収、林 識慧「ジェイムズ・スチュアートの利潤概念」、時永 淑編『古典派経済学研究(IV)』雄松堂1987年所収、田添前掲書第二章「重商主義の生産過程論」、および、竹本前掲書第二章「釣り合いの理論」(とりわけ158-163ページ)を参照)。ただし、次の点だけは確認しようであろう。すなわち、マルクスが提示している生産費の理論は、全体を大きく間接労働と直接労働の二つの部分からなるものとするという点からも、スチュアートのように原則として単独で操業する「職人」(独立商品生産者)をモデルとするのではなく、資本・賃労働関係を最初から前提しているという点からも、スチュアートよりもはるかにリカードの生産費理論に近い。

4. 商品交換と貨幣

最後にこの節では、スチュアートと古典派との商品交換に対する把握の仕方の対立的な構図とのかかわりにおいて、40年代後半のマルクスがいかなる位置にいたのかを確認しておきたい。これは同時に、この時期のマルクスが商品交換における貨幣をどのように把握していたのかということにも関連する。

周知のように、古典派経済学はスミス以来、商品交換を商品同士の直接的交換(物々交換)としてとらえ、流通手段としての機能しか認められなかった貨幣が商品交換のなかで不可欠の役割を演じるとは考えなかった。こうして、物々交換としての商品交換は、商品

所持者としての対等な立場に立つ当事者間の相互的な関係と理解され、供給は即そのまま需要（他人に自分の商品を譲渡しようとすることは同時に他人から商品の譲渡を受けようとしていること）であって、需要と供給は定義上同一であると考えられる。そして、販売と購買とは商品取引という同一の行為の裏表をなすにすぎず、需要と供給（買いと売り）にはその性質上不均衡や不一致はありえないとされる（セー法則）。このような商品交換理解とそこにおける貨幣の役割のいわば極小化とは、スミスをはじめとする古典派が重商主義の富観念とこれに裏打ちされた政策体系に対する批判をこめて、アンチテーゼとして打ち出したものであったが、「最後の重商主義者」として「貨幣的分析の体系」を展開したスチュアートは、こうした古典派の商品経済観とは対極的な見方を『原理』の体系において示していた。ここではマルクスとの対比のために必要なかぎり、スチュアートの商品交換とそこにおける貨幣についての見解を一瞥しておこう。

『原理』第二篇第二章「需要について」には次のように述べられている。「需要 (Demand) はトレードに適した用語であると考えられるので、今後はこれが欲望 (wants) の代わりに用いられることになる。この欲望という用語は第一篇では物々交換 (batering) に関連して使われていた。[・・・] この用語が物々交換に適用されるにせよトレードに適用されるにせよ、いつも相互的 (reciprocal) なものであるように見えるに違いない。私が一足の靴を需要するとすれば、靴屋も、貨幣かまたは彼自身の使用する何か他のものを需要する。」(Steuart, *An Inquiry* ..., 前掲スキナー版, p.151-2.) しかし、需要をこのように相互的なものとして捉えることは適切ではなく、物々交換ならぬトレードにおいては常に一方向的なものと考えなければならない。「需要はつねに商品 (merchandize) にかんするものと解される。貨幣に対する需要は、為替手形の場合をのぞいては、けっして需要とはよばれない。商品を手にしてあるものがそれを貨幣に変換したいと思うとき、売りに出す (offer to sale) と言われる。」(ibid., 152) 「需要はつねに商品にかんするものである。需要するものは買い手 (buyer) である。売りに出すものは売り手 (seller) である。」(Steuart, *the Works*, Vol. II, 1805, Ch. XXXI, p.214.)

スチュアートはここで、需要という角度から物々交換と貨幣を介した商品交換との構造上の相違について論じている。そして、物々交換がトレードによって商品交換に変形されると交換における相互的な関係はなくなり、売りと買いの反転不能な非対称的な関係（需要と供給が互いに反対の方向に作用する関係）に取って代わられることを明らかにしている。商品交換では、買い手側が貨幣をもって商品に対して発動する需要だけが需要と呼ば

れ、商品を販売しようとする売り手の貨幣を入手しようとする欲望を貨幣に対する「需要」と呼ぶことは、物々交換の相互的な構造からの誤った類推にすぎない。各交換当事者は一回一回の交換において、そのつどいずれかの行為の担い手として、売り手ないし買い手という必ず一方の役割においてのみ登場する。商品をもって貨幣を取得しようとする者は売り手であり、貨幣の買い手とは言わない（「需要はつねに商品にかんするもの」）。貨幣をもって商品を取得しようとするものは買い手であり、貨幣の売り手とは言わない。そして、スチュアートが供給（『原理』ではこの用語の使用例が少ないことについては注(17)を参照）ではなく需要について特に一つの章を設けて論じているのは、もちろん貨幣に裏打ちされた需要（有効需要 *effectual demand*）が商品交換が機能するにあたって決定的な意味を有すると考えていたからである。

さて、以上に需要という角度からその一端をかいま見たスチュアートの商品経済認識は、個々の商品が交換のなかで直接的に貨幣の資格において登場するとみなす古典派的な見方とは対立的に、後年のマルクスの価値形態論をささえる商品認識（供給側に立つ商品には交換の成否の決定権はなくあくまでも受動的に買い手がつくのを待つだけであって、商品交換は貨幣による需要の一方向的なイニシアティブによってのみ成り立つ）にもつながるものであると思われるが、40年代後半期のマルクスはこの点にかんしていかなる理論的立場を示していたのであろうか。

あらかじめ結論的にいえばこの時期のマルクスは古典派の圧倒的な影響下にあって、ほとんど古典派と同じ見方を取っていたといってもよいと思われる。若干の文章を引いてこの点を確認してみよう。

次の文章でマルクスは、先にスチュアートが批判していたのとまさに同じ意味で需要と供給の同一性を主張している。これはプルードン批判の文脈で言われていることなので、マルクス自身の積極的な意見の表明としてはやや割り引いて見なければならぬが、ともかく彼が自分の考えを述べている文章であることにはかわりない。「需要する人は、また何らかの生産物を、すなわち、あらゆる生産物を代表する記号である貨幣を、供給しないであろうか〔・・・〕。他方、供給する人もまた何らかの生産物を、すなわち、あらゆる生産物を代表する記号である貨幣を、需要しないであろうか〔・・・〕。需要は同時に供給であり、供給は同時に需要である。」（Karl Marx, *Misère de la philosophie*, *ibid.*, p.17.）この文章は貨幣と商品の双方が同時に需要と供給の役割を演じうることを言っている。すなわち、商品の需要者は同時に貨幣の供給者であり、商品の供給者は同時に貨幣の需要者で

40(40)

ある、ということである。貨幣と商品をとともに交換対象としては同等の資格であるとすれば、このような形式的な議論が可能であろう。ではマルクスは、貨幣が交換において果たす商品とは決定的に異なる役割を認識していなかったのであろうか。次の引用文は、この設問に対して肯定的に回答しなければならないことを示唆していると考えられる。

上の引用文と同じ文脈の少し後に次のように述べられている。「生産物は、生産の過程において、原材料、労働者の賃金、等々といったあらゆる生産費と交換されているのであるが、これらの物はすべて売買価値なのである。それゆえ、生産物は、生産者から見れば、ある量の売買価値をあらわすのである。彼が供給するものは、たんに有用な物であるだけでなく、またなによりも売買価値なのである。／需要についていえば、それは交換手段を自由にしうという条件においてのみ有効(effective)⁽²⁴⁾であろう。これらの手段そのものが生産物すなわち売買価値である。／それゆえ、われわれは供給と需要のうちに、一方では売買価値を要した生産物およびその販売の必要 (besoin de vendre) を、他方では売買価値を要した手段および購買の欲望(désir d'acheter)を、見いだすのである。」(Karl Marx, *ibid.*, p.18.／はパラグラフのかわり目をあらわす)

この引用文からわれわれは、『哲学の貧困』執筆当時のマルクスが商品交換をどのように把握していたかを見て取ることができるように思われる。すなわち、供給を代表する商品と需要を代表する貨幣とはともに、本質的にある大きさの費用を要して生産された生産物(労働生産物)なのであり、このことによってあらかじめ価値の大きさが決定されており、その決定された価値の大きさに対応する比率で交換(販売または購買)が行われるのである。だから、商品は交換に先立ってすでにある与えられた価値量として存在しているのであり、貨幣との交換はただ一定の大きさの価値が姿態を変換するという形式的な操作とされることになり、商品と貨幣との交換(販売)を経由してこの貨幣をもって他商品を購入(購買)すること(W-G-W)と、商品同士の直接的な交換(W-W)との差異が明確でなくなる。そうなると、前者はつまるところ後者に還元されうるような理論構造が容認されることになる。実際、マルクスの議論の運びは商品交換があるときはW-G-WまたあるときはW-Wと理解されている、つまり必ず前者でなければならないとは理解されていない、と考えざるを得ないような形になっている⁽²⁵⁾。次に引用する文章は、『賃労働と資本』でマルクスが商品の価格を競争にかかわって究極的に制約する要因として、古典派的な生産費の概念を最初に提起した直後のものである。「彼〔資本家〕がこの商品と交換に、その生産により少ない費用しか要しなかったある量の他の商品を取り返すとすれば、彼は損をし

たのである。彼が自分の商品と交換に、その生産により多くの費用を要したある量の他の商品を取り返すとすれば、彼は得をしたのである。」(Karl Marx, *Lohnarbeit und Kapital*, ebenda, S. 404.)この費用は最終的には労働時間に還元されるのであるから、ここでもやはり先の『哲学の貧困』からの引用文と同様に、商品交換は事実上価値の大きさがあらかじめ決定され（そして、認識され）た商品同士の交換として捉えられており、交換による得失をどのように判断するかが述べられているのである。ここまでくれば、商品交換はスチュアートの貨幣による需要を起点として作動する非対称的な構造を有するものとしてよりも、むしろはるかに、物々交換という「相互的なもの」として理解されていた、と言わなければならないであろう。

ところで、スチュアートは『原理』第二篇第二八章でヒュームやモンテスキューの貨幣数量説に対して執拗な批判を加えているが、40年代後半期のマルクスはスチュアートとも50年代以降のマルクス自身（反貨幣数量説）とも異なって、リカードの影響の下に貨幣数量説を積極的に取り入れているように思われる⁽²⁶⁾。この点を最後に見ておこう。

次の引用はマルクスの二つの著作の関連箇所からのものである。「貨幣としての金と銀はあらゆる商品のうち生産費によって決定されない唯一のものである。〔・・・〕流通上の必要と発行貨幣量のあいだに一定の比率が守られるかぎり、それが紙幣であるか金貨であるかプラチナ貨であるかまたは銅貨であるかにかかわりなく、貨幣の内在的価値(valeur intrinsèque)⁽²⁷⁾ (生産費)とその名目価値のあいだには守るべき比率など問題にはなりえないであろう。もちろん、国際交易においては、貨幣は他のいかなる商品とも同じように労働時間によって決定される。しかしそれは、国際交易に入れば金や銀もまた、貨幣としてではなく生産物として交換手段だから〔・・・〕なのである。リカードはこの真理をきわめてよく理解していたので、労働時間によって決定される価値によって彼の全体系を基礎づけた後に、また、『金と銀も、他のすべての商品と同じように、それらを生産して市場にもたらすのに必要な労働量に比例してしか価値を持たない』[『原理』第27章「通貨と銀行について」の冒頭部分から。Cf. Sraffa's edition, p. 352]と言った後に、にもかかわらず、貨幣の価値はその材料のなかに固定されている労働時間によって決定されるのではなく、需要と供給の法則によって決定されるにすぎない、と付け加えている。」(Karl Marx, *Misère de la philosophie*, ibid., p.58-9. 強調は原文)「16世紀には、アメリカの発見の結果、ヨーロッパで流通する金と銀が増加した。こうして、金と銀の価値は他の商品に比較して下落した。」(Karl Marx, *Lohnarbeit und Kapital*, ebenda, S. 412.)

ここに示されている見解によれば、金や銀は、他のすべての商品と同じひとつの商品としての内在的価値を有するにもかかわらず、国内流通の部面では貨幣として機能するので（この限りでは商品ではなくなり）、その貨幣としての価値は需給関係のみによって決定されるが、その反対に金や銀がコストを投入して生産された商品としての資格において交換されるのは、それが（国際交易の部面で）貨幣ではなくなって他の諸商品とならぶ一つの商品として交換（物々交換）されるかぎりでのことである。こうして貨幣として機能する物は商品の世界から除外されることになり、労働価値論と抵触しない形で貨幣数量説の妥当性を主張しうる理論的枠組みが形成される。これは古典派の貨幣観における貨幣の商品世界に対する外在性にきわめて近い見解であろうと思われる。

50年代後期以降のマルクスは、価値形態論や交換過程論によって貨幣の商品世界内在性（商品貨幣説）を主張し、これとまったく整合的にスチュアートの貨幣数量説批判を高く評価して（『経済学批判。第一分冊』第二章「貨幣または単純流通」の補論「C流通手段と貨幣にかんする諸理論」を参照）これに同調しているが、こうしたスチュアート評価は上に見た40年代の著作における評価とはきわめて対照的である。彼がスチュアートの貨幣数量説批判の意義を認識するにいたるには、50年代に入ってからロンドンでの（51年の抜粋ノートの作成に象徴される）本格的な研究が必要とされたのではないだろうか。おそらく、商品・貨幣関係についてのマルクスの見方の転換にも彼のこの作業が与っていたのであろう。

ともあれ、本稿で検討したマルクスの経済学的見解にはいくつかの点でスチュアートの影響をかいま見ることができるとはいえ、注(1)の前掲拙稿と同じように、こと価値論の場面にかんするかぎり古典派（リカード）の圧倒的な影響を再確認して結論としなければならない。今回は前稿と同じ主題にかんして、そこでは検討を加えなかった若干の問題点について、スチュアートにことよせて論じてみたにすぎない。

注

- (24) スチュアートもかかる需要を有効需要 (effectual demand) と呼んでいる。ただし、これと同じ用語自体はスミスも『国富論』の中の多くの箇所で使用している。
- (25) これは、40年代後期のマルクスにかぎらず『資本論』の価値形態論の中にまで混入している古典派的な商品交換観に由来するものである（その源がスミスやリカードにあることは彼らのテキストを検討してみれば明らかになるが、ここでは省略する）。二商品の直接交換の想定が、これとは根本的に異質な前提に立脚する価値形態論に対していかに阻害的に作用しているかについては別の機会に論じた（拙稿「価値形態論の基礎構造」、『エコノミア』93号）。
- (26) 流通過程にある貨幣を他の商品とおなじひとつの商品と考えるならば、労働価値説と貨幣数量説は両

立しえないはずである。古典派が一般商品に対しては労働価値（費用）説を採用しておきながら、貨幣についてだけは例外的に、その価値はもっぱら商品総体に対する貨幣の数量比率によって決定されるとするのは、貨幣を商品世界に属するものとは考えない非商品貨幣説的な了解に立っていたということなのかもしれない（だとすれば、労働価値論というのは根本的に非貨幣的な物々交換の世界の論理だった、ということになるのだろうか）。おそらく、この時期のマルクスも労働価値説と貨幣数量説の関連については明確な見解をもたないままに、両者をリカードからそのまま受け入れたのではないだろうか。

(27) この語については注(11)を参照のこと。